

さらに、「空気を読ませる」ということは「多数の思考に同調しろ」と強制しており、要するに「お前個人の自由な思考は許さない」「その場において、ある一定の価値観しか認めない」といった、異質な思考を排除していると考えられる。

多数派は、共有意識という後ろ盾をもって少数派を攻撃するように、ただ多数の人間と価値観を共有することで安心し、自らを優れた強い人間と思ひ込みはしないだろうか。そしてこの「空気」はもちろん家族から友人、社会、国家など人が集まるいたるところに存在する。「KY」という現代の言葉を共同体特有の価値観、知識という概念にまで拡張すると、人のこころの中にはびこる不安や空虚さが浮き彫りとなる。

まさに、「個性の時代」と言いつつ、多数派同調傾向の日本人を端的に言い表した略語であったのではないだろうか。

【町田 幸雄】

◇ わが町、佐久

一 健康と長寿都市 一

東京駅より長野新幹線に乗り、ウトウトしていると冬場の窓際は特に寒さを感じることがある。気がつくとき軽井沢駅付近である。

この当たりの車窓から見える浅間山とそれに連なる峰々を過ぎると、私の住む町佐久平駅に到着する。

ちょうど長野県の東部に位置する。佐久方面から北側に望む雄大な浅間山、ここからの眺めは最高である（自己満足）。また、自身の勤務する病院からも見えるのだが、今年のようにいつになく雪の多い年は、純白に包まれその「凜」とした姿は、広い青空とみごとに調和している。

雪が解けると深緑の山肌が・・・

夏には澄み渡る大空に少し雲がかかり、雄大かつ優美な風景が楽しめる。四季折々の姿を映し出す浅間山に勇気付けられるのは私だけだろうか。

さて、佐久平は昭和 43 年県歌として制定され信州各地で遠い昔から愛唱されている「信濃の国」

・・・【長野県民はどこにいてもこの歌を聞くとなぜかうれしくて、なつかしくて口ずさんでしまうのですが】・・・

の一節に歌われているように、今でも活発に火山活動を続けている浅間山や、山梨県にまたがる八ヶ岳など火山の噴火によって形成された盆地である。

現在は、長野新幹線・上信越自動車道などの交通網の整備により、首都圏へのアクセスも便利になってきている。

今、バンクーバー五輪で日本選手の活躍が注目されているが、この高速交通網の事業は長野冬季オリンピックにあわせて整備されたため、突貫工事的な要素があったように記憶している。

そして、静岡県と結ばれる中部横断自動車道の工事が着々と進められている。海のない長野県は、すでに上信越自動車道によって日本海とはつながっているが、近い将来太平洋ともつながり、長年の夢が成就することになる。

また、佐久平の中央には、千曲川の清流が悠々と流れ新潟県で信濃川となり日本海に注がれる。日本一長い川の流れである。この河川敷（名称：千曲川スポーツ交流広場）を利用して五月の連休の間「子供たちに感動を」のメインテーマのもと、佐久バルーンフェスティバル（熱気球ホンダグランプリ公式戦）が開催され、今日では佐久の風物詩となって定着している。

気候・風向きに左右されるが、早朝より繰り広げられる色とりどりの気球の競技飛行は大勢の観客を魅了している。そして、同時期に「佐久鯉まつり」も開催される。佐久市は鯉の里でもある。

鯉は古から出世魚とされていることから、無病息災・子供の成長・立身出世など、鯉に関する様々なイベントが催されている。

この佐久鯉祭は市制誕生の二年後、昭和 38 年に市民祭がなかったことから、特産である鯉の宣伝普及を兼ね、市民の融和と発展の願いを込め開催されたと言われている。鯉料理も色々味わえ、甘露煮・あらい（刺身、酢味噌で）・鯉こく（味噌仕立て）等楽しめる。

味噌といえば、佐久市安原の安養寺は信州味噌発祥の地と言われている。鎌倉時代、覚心という僧侶が中国で学んだ味噌づくりの技術を広めたところ。この安養寺味噌を使って健康増進をはかりたいとご当地ラーメンが誕生した。

地元のラーメン店主がそれぞれ工夫をこらして、各店オリジナルの「安養寺ラーメン」として、現在、佐久市内 20 店舗で食することが出来る。是非鯉料理ともどもご賞味を。もうひとつ、信州そばもお忘れなく。

最後に信州佐久地方と言え、日本でも有数の長寿の里としても知られている。佐久の住みやすい風土と千曲川の清流、そこで育った佐久鯉をはじめ、くだもの・野菜などの食物と、昔ながらの勤勉さ、信仰の深さが健康長寿の秘訣である。佐久市野沢の成田山薬師寺山門入り口に、「それはそれは」愛嬌のあるかわいらしい「びんころ地蔵」がある。参道は参拝客や地元のお年寄りなど多くの人でにぎわいを見せている。健康で長生きして（びんびん）、楽に大往生（ころり）を願って建立されたお地蔵さんである。

びんころ地蔵にあやかり（びんびん）（ころり）と願いたいものである。

【小栗 孝志】

◇ QCサークル活動

品質管理（QC：Quality Control）は、ウォルター・シューハート、エドワード・デミング、石川馨らにより第二次世界大戦後に構築されました。

不良品ゼロを目指すための品質管理活動として、1960 年ごろから製造業の現場に広く普及し、品質管理部や品質管理推進室が設置され組織的な推進が図られました。

そして、検査だけでは品質は保証できない、品質は工程が大切であるという考え方より製造部門だけでなく、購買・販売・サービス部門を巻き込んだ総合的品質管理という時代になってきました。

また、ここ数年の間には、この品質管理手法が医療の質と安全と患者満足度を高めるために最適な方法であるとも言われ、少しずつ病院等でも活動が始まっています。

『QCサークル』という言葉はみなさん聞いたことがあると思います。すでに、全国的に医療機関にも浸透してきています。『医療の改善活動－医療・看護・患者サービスの質の向上への取り組み』というワークショップも開かれ、改善活動事例が多数発表され、各施設で効果がでているようです。

さて、ここで『QCサークル』はどんな活動なのか紹介します。

日本では、財団法人日本科学技術連盟が推奨している QC 活動があります。QC を実践する小集団活動が『QCサークル』です。第一線の職場で働く人々が集まり小グループで継続的に製品・サービス・仕事などの質の管理・改善を行うのです。取り組む期間は半年から長くて 1 年です。運営を自主的に行い、QC の考え方・手法などを活用し、創造性を発揮し、自己啓発・相互啓発をはかり活動を進めます。たとえば、「A 製品用金型の型欠け不具合撲滅への挑戦」「患者様の待ち時間短縮」「検査結果の遅れを減らそう」「糖尿病患者様の指導を充実させよう」など、さまざまな業種・職種が活動しており、この財団法人日本科学技術連盟の資料によると約 40,000 の業種・職種（医療機関含む）が登録して活動、外部発表しています。

この QCサークル活動の基本理念は、『人間の能力を発揮し、無限の可能性を引き出す。人間性を尊重して、生きがいのある明るい職場をつくる。企業の体質改善・発展に寄与する。』です。簡単にいうと自分のため、他人のためになっている活動です。QCサークルメンバーは、活動を通じて仕事に必要な知識や技術を勉強し身につけます。また、グループ活動ですから、リーダーになればリーダーシップも養われます。リーダーは、メンバーの意見を聞いたりまとめたり、QC手法